者共無心許思ふべし。はやく被歸候へ。當分は新川郡にて堪忍めされよ、頓て大國可進。はやく歸り可被申候。是を進ずるとて指料の腰物を、こじりを持って柄の方を成政へ指出し給ふ。成政忝しと頂戴し退出也。

一、大坂城普請役と横山城州

元和六年の頃大坂城普請、本藩より惣奉行は本多安房守・横山山城守也。普請成就し諸國の奉行等罷歸候時分に成、御國の丁場の石垣少しひずみて見ゆると、江戸よりの奉行申出で、大事の儀に候間築直し被申よと也。山城守答て云。

此儀は此方にて疾く見附申候に付、以後のよわみにも可罷成哉と遂吟味候處、少も不苦と申候に付、其趣に極申候。唯今天下の諸大名御普請仕廻罷歸候所に、筑前守丁場不調法有之築改候と有之候ては、天下へ對し失面目候。此儀筑前守不存事にて、拙者兩人の不調法に候。何も不存筑前守に面目を爲失候て、我等二度對面は難成候間、先づ兩人切腹いたし、其後跡にて如何様にも築直し可被仰付と、申切たる氣色なり。御奉行もこまり、其分にて請取相濟。城州返答扱も、手柄とて、微妙公御機嫌不大形候。御家中にては人

持以下馬廻迄も、是を築直すならば一統に潰れ可申所、城州手柄を申たり、扱も、と悦合、城州威勢不斜。其歸路に小松城下へ立寄る。城代前田對馬守は山城守爲には小舅也。左様の儀にて大なる饗應し、今度大坂にて強き被申様にて利運に成、公私ともに息を續たり、目出度可祝とてひた飲に飲ほどに、金澤へは夜半頃に參着す。御家中舉て城州の迎として、自身にも出で人も遣すもの夥し。微妙公本丸の櫓より御覽じ、扱も夥敷提灯かな何事ぞみよと被命。山城守罷歸候に付、御家中迎に罷出候もの、又は迎に遣候人の火にて候旨申上げれば、御氣色不宜候。翌日城州登城有之、土産の品々献上候處、久々苦勞に思召候。早々罷歸られ緩々可有休息候。重て御目見可被仰付との儀也。人々推察には、御式臺迄も御出被成、大坂の様子御褒賞も可被成とおもひ、山城も其心得に候處、思の外にて興醒めぬ。十日許も過て拜謁被仰付候。其節より宮城采女・西尾隼人・松平内匠三人に御用向被仰付候て、安房・山城は何事も不構、大形成御用のみ勤之。公二十八歳の御時也といふ。

右百餘箇條、最初小川氏筆記を除ての外は、不殘延寶年中

關屋政春記聞の内より鈔出し、少し潤色を加へ補綴する而已。

享保十年膺月凌新書。